

# みんなの 健・康・と・法・律



福岡大学医学部精神科 講師 小林 隆 児

## こころの発達(第7回) ことばの発達と障害

その3

精神遅滞と違つてことばだけがわりと選択的に遅れを示す障害があります。ちょうど大人の失語症と対比できるところから発達性失語症とか先天性失語症といつたりしますが、一度ことばが獲得された後の障害である失語症とは違ふことから発達性言語遅滞ともいわれています。

ことばの障害の程度によつていくつかに分けられています。最も軽症である構音障害から、表出性失語、受容性失語、聴覚失認(語覺)など次第に重症になっていきます。

構音障害はことばの内容そのものには異常は無く、発声に困難を伴うものです。従つて言語治療によつてかなりの改善が期待できます。予後も良好です。

表出性失語は成人の失語症という運動性失語にあたり、言語理解は良好であるのに表出能力に問題をもっています。受容性失語は大人の感覚性失語にあたり、

言語理解にも問題があります。

さらに言語の基本が十分に獲得されていないという事は対人関係になんらかの問題をもっていることが多いために、例えばマイペースで多動であつたりすることが多く、単純に言語の問題を扱えばよいというわけにはいきません。とくに最後の聴覚失認の子供になると自閉症との鑑別が大変問題になります。両者とも重篤な言語獲得の障害が基盤にあるからですが、行動面でも非常に似ています。強いて違ひをあげれば、前者では感情疎通性が良好ですし、身振り模倣もより上手ですし、みだて遊びもできる点などでしょう。現在失語症の子供に遊戯を取り入れながら積極的に言語治療を行うようになっていきます。これらの子供達は精神遅滞とは異なりませんが、3歳までにことばの意味が理解できなかつたり、5歳までに意味ある言語を発生しなかつた場合は将来ある程度の精神遅滞を残す可能性も頭に入れておくべきでしょう。

うしました?

# ドクター

ハイ

## 口腔カンジダ症

口腔カンジダ症というのは、カビの一種であるカンジダ・アルビカンスと言う真菌によつて起こる、口腔粘膜の感染症です。普通この菌は、健康な人の口腔内において、滅多に病気の原因菌となることはありません。即ち、健康な人にカンジダ症が発症することは、きわめて稀な事なのです。本症の発生する誘因として全身的な病氣(血液疾患、悪性腫瘍等)をもっている場合が多いです。しかしこのような病氣を持っていないくても乳幼児、妊産婦、老人などで体力がおち、菌に対する抵抗力が弱つたり、あるいは特に最近良く用いられる抗生物質の使用によつて口腔内の常在細菌のバランスが崩れて、カンジダ・アルビカンスが症状をおこした(菌交代現象)場合が多くなつたということがわかつています。口腔カンジダ症は症状によつていろいろな種類がありますが、小児に一番多いのは急性偽膜性カンジダ症で、一名驚口瘡とも言われるもので



福岡歯科大学 小児歯科学教室 助手 石井 香

す。最初、舌、唇、喉、頬などの粘膜に、白く小さいぶつぶつが現れ、徐々に牛乳の粕のような苔状物に拡大していきます。放置すると口の中全体に広がります。唇を捲つて見ると、内側の粘膜がこれらの白い苔状物で覆われていることがよくあります。この牛乳の粕のような苔状物はガーゼなどで擦ると容易に剝がれ、剝がれたあとには赤くはれて出血し易いです。この時期、患児は食事をする時にしみるため、あまり食が進まなかつたり、歯磨きを嫌がつたりするので、初めて其に気付くお母さんも多いようです。

治療法としては、もし抗生物質を使用しているのであれば投薬を受けた医師、歯科医師と相談し直ちにこれを中止します。それだけで殆ど自然に治ります。更に2%の重曹水で嗽をしたり、1~2%のゲンチアナ紫、抗真菌性軟膏の局所塗布などを行うと良いようです。しかし、この病氣の確定診断には細菌検査による菌の確認が必要ですし、

## 健康コラム

また、他の病氣との鑑別診断も必要ですので、出来れば大病院などの小児科や小児歯科を受診することをお勧めします。

テンカンの多くは知能の遅れに結びつきません。

Q 五歳の男の子。いわゆるテンカンですが、知能障害が心配です。

A テンカンといえば、遺伝性で一生涯らない病氣、知能障害を伴う病氣と考えがちですが、大部分のものが胎児期、出産児、乳児期などに脳に受けた障害が原因であることがわかってきました。最も気になることは知能や運動が遅れないかということとです。年に数回くらい発作では知能へ重大な影響を与えることはありません。とはいえ、難治性のもものもありまふすし、発作での反復回数が多かつたり、持続時間が長いと、知的レベルが低下する傾向があります。こうした問題があるケースは、やはり早期診断、早期治療が重要で、運動は以前は禁止されていましたが、現在では運動によつて脳波が改善されるといわれ、積極的に行ってよいとされています。ともあれ、子どもが劣等感を持たずに、集団のなかで伸び伸びと過ごせるように環境を作つてあげることがまふす大切です。